横浜キネマ倶楽部

第６２号　会報
2021年3月13日発行

第６２回上映会〈 内田裕也さん三回忌追悼上映 〉

十階のモスキート

１９８３年／日本映画／１０８分／ブルーレイ上映
崔　洋一　第１回監督作品

©1983「十階のモスキート」製作委員会

2021年3月13日（土）

［上映時間］　１３：００
［講　　演］　１５：００～１６：００　講師：崔 洋一監督
（日本映画監督協会理事長）
［会　　場］　横浜市南公会堂

『　十階のモスキート　』

［ 物　語 ］

男は万年係長のサエない警察官である。妻のＴＯＳＨＩＥはそんな男に愛想をつかし、娘ＲＩＥを引き取って離婚した。娘は原宿のロックンロール族に狂い、時々男に金をせびりにくるが、男は娘に対しては甘かった。

１ＬＤＫの団地の十階に住み、慰謝料や毎月の養育費も満足に払えず安酒をくらうだけの毎日の中で、彼の気晴らしといえば飲み屋で知り会ったＫＥＩＫＯとのセックスと上級試験のために購入したパソコンの練習であった。

©1983「十階のモスキート」製作委員会

［キャスト］

内田裕也（主人公の男）
小泉今日子（RIE）
吉行和子（TOSHIE）
中村れい子（KEIKO）
宮下順子（「ヒーロー」のママ）
風祭ゆき（婦人警官）
アン・ルイス（万引の女）
ビートたけし（競艇場の予想屋）
横山やすし（芸能人風のシャレ男）
阿藤海（男の同僚A）
清水宏（男の同僚B）
下元史朗（男の同僚C）
鶴田忍（TOSHIE の男）
梅津栄（初老の男）
小林稔侍（「ヒーロー」の客A）
高橋明（「ヒーロー」の客B）
浅見小四郎（「ヒーロー」の客C）
草薙良一（太陽ローンの岡村）
伊藤公子（太陽ローンの女店員）
安岡力也（友野金融の矢沢）
仲野茂（リーゼントの男）
趙方豪（山崎）
佐藤慶（署長）

［スタッフ］

監督：崔洋一
脚本：内田裕也　崔洋一
音楽：大野克夫
撮影：森勝

☆本日の講演☆

崔 洋一監督　プロフィール

日本映画監督協会理事長

１９４９年長野県生まれ。大島渚監督や村川透監督などの助監督を経て、１９８３年にベネチア国際映画祭に出品された『十階のモスキート』で劇場映画監督デビューを飾る。以後、『いつか誰かが殺される』(84 年)など一連の角川映画を監督したほか、数々のテレビ映画を手掛け実力を開花していく。１９９３年、『月はどっちに出ている』で 53 にわたる映画賞を総なめにし一躍脚光を浴びる。

１９９６年には韓国・延世大学に留学し、韓国の近代映画史を研究しながら多くの韓国映画人と交流。帰国後、ロカルノ映画祭国際シネクラブ賞を受賞した『豚の報い』(98 年)などを手がける。２００２年、『刑務所の中』-ブルーリボン賞などを受賞-。２００４年『クイール』、『血と骨』と立て続けに話題作、意欲作を世に問い、高い評価を得ている。

（日本映画監督協会ホームページより）

＜＜＜第61回上映会「アダムズ・アップル」アンケート集計結果＞＞＞

日時:2020年11月8日　来場者数:114名　回収数:52枚　回収率:45.6%

＜作品についての評価＞　・とても良かった36.5%　・良かった55.8%　・あまり良くなかった1.9%

＜感想＞

・正直ラストは？？？理解できなかった。神への信仰の強さに敬服(？)したアダムともう一人は新しい道へ、敬服できないDrともう一人は去っていった。ラストのアダムの変身にホッとする。

・過去や現在や未来に渡って、自己と向き合ったり、他人を想ったり、生死や内面に迫った題材がよかった。どうしようもなさと田舎の美しさも素晴らしかった。

・北欧色画面が美しい。ハッピーエンドでよかった。 ストーリーの有る映画は苦手ですが、映像は？？美しかった。こんな HappyEndの映画が有っても良いと思う。もう少し深味があっても良いと思いましたが、これで勇気付けられるのなら、それはそれでとても良いと思った。映画とはそんなもので有って良いと思う。

・深い見ごたえがある。アダムとイバンナの行きつくところ同じでほっとした。

・不思議な感覚の映画でした。見終わってジワーとしみ入りようでした。

・最後は良かった

・神学的であるが、喜劇性もあり、面白かったです。

・おもしろかった。日常の世界感と違っていた。えっと思うシーンが数多くあり理解に苦しむシーンも多かった。

＜講演会についての感想＞

・解説してもらったので、より意味や興味が深まった。 大変興味深く面白かったです。北欧についてもっと知りたい(勉強したい)と思っていました。

・映画がより理解できました。北欧に対し理解が深まった。個人主義がどういうものか実感できた。今さわいでいるコロナ被害？多いのは当然とも思えた。

・声もきれいで良かった。

・デンマーク人と教会の関係知りたかった！　お話がとても好感がもてました。全体が良くわかりました。

・・・・・・　アンケートに、ご協力ありがとうございました　・・・・・・

次回第６３回上映会お知らせ

『 約 束 名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯 』

樹木希林さん追悼上映

２０２１年6月5日（土）

上映時間　①１１：００～

②１４：２０～

講演：13：05　～ 14：05

講師　阿武野勝彦プロデューサー

地図

〔入場料〕前売 1,000円　　当日 1,300円

障がい者 1,000円　（介助者１名無料）

〔会 場〕横浜市旭公会堂

（旭区総合庁舎４階）　相鉄線**「鶴ヶ峰」駅 北口**下車　徒歩７分

２０１２年/日本/１２０分/カラー/ブルーレイ上映

監督・脚本：齊藤潤一　プロデューサー：阿武野勝彦　出演：仲代達矢　樹木希林　山本太郎

独房から無実を訴え続けている死刑囚がいる。奥西勝、86歳。昭和36年、三重県名張市の小さな村の懇親会で、ぶどう酒を飲んだ女性5人が死亡した。逮捕された奥西は「警察に自白を強制された」と訴え、無実を主張。1審は無罪だったものの、2審は逆転死刑判決。そして昭和47年、最高裁で死刑が確定した。奥西は、死刑執行の恐怖と闘いながら、いまも再審を求め続けている。奥西の無実を信じているのが、母、タツノ。事件で村を追われ、見知らぬ町で独り暮らしを始めた。内職をして電車賃を稼ぎ、月に1度、名古屋拘置所にいる息子に会いに行く。タツノは奥西に969通の手紙を送った。「お金のあるあいだ、湯たんぽを貸してもらい、牛乳も飲みなさい」「やっていないのは、おっかあが一番知っている」「長い間の苦労は毎日、涙いっぱいですよ」再審を待ち続ける母。奥西はタツノと約束をする。“無実を晴らして、必ず帰る” しかし、その約束は果たされることなく、母は昭和63年、84歳で亡くなった。（ホームページより）

横浜に映画ファンの思いが反映される映画館を作ろう！

横浜キネマ倶楽部は、横浜で永年親しまれてきた映画館の相次ぐ閉館を惜しむ映画ファンが集まり、２００５年５月発足し、「横浜に映画ファンの思いが反映される映画館をつくる」ことを目標に掲げて活動を続けています。会の存在をより多くの皆様に知っていただき、映画館をつくる目標に一歩でも近づけたい、それと同時に良質な映画を上映することで、映画ファンの交流の場を提供したい、という思いで年４回の上映会を行っています。

横浜キネマ倶楽部会報

横浜キネマ倶楽部 発行

〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2
かながわ県民活動サポートセンター　No.269
TEL：080－8118－8502　（10時～18時）
Eメール：yokohama_kinemaclub@yahoo.co.jp
HPアドレス：https://ykc.jimdofree.com/